

★海外文献紹介★

# Seagull・かもめ

—能力のある子どもの力を開発  
するためのプロジェクト—

*Childhood Education* Apr./May 1980

アメリカの教育界ではいつも「実験」が起こっている、というのが読後の感想である。この論文は、近年アメリカで試みられている、「能力のある子どもたち」のために特別に開発された教育プログラムの一つを紹介したものである。

一九七二年、「能力のある子どもたちは、今や無気力と敵意とによって打ちのめされている」という報告書が議会に提出されたのをきっかけに、様々な資金援助を背景にして、数百にのぼる特別プログラムが、雨後のたけのこのように全米各地に出現した。しかし、各プログラムがほとんど同時にスタートし、かつその歴史も浅いため、大部分のプログラムは未だ予備実験の域を出ていない。そうした中であって、一頭他を抜いているとしてここに紹介されているのが、ユタ州で行なわれている Seagull・かもめ (Supplying Enrichment And Guidance, Unusual Learning Labs の略) と呼ばれるプロジェクトである。

これはユタ州教育委員会の監督の下に、センターを中心として、能力に恵まれた子どもたちの自尊心、学校に対する関心、および創造的な力を高めようという試みである。従来の教室では、能力のある子どもたちは、何でもできずぎるとか、堅苦しいなどという理由で仲間はずれにされたり、自分の能力を社会に受け入れられるような仕方で発揮することを学んでこなかったために、教師からは反抗的だと思われたりしがちだった。加えて、年少の児童は、なぜ自分が他の子どもとは違う感じ方をするのかを理解することができないでいる。それら様々な原因によって、能力がありながら、歪曲された貧弱な自己像しかもてないでいる子ども

たちに照準を合わせて、このプログラムは展開されていく。

さて実施段階では、二校から四十五名の四、五年生が選ばざれ、二名のベテラン女性教師がその指導にあたる。児童を選ぶにあたっては何をもって「能力のある子」とするのかが問題となるが、それは、プログラムを応用しようとする各センターが、指導陣その他に応じてそれぞれに決めることが望ましい、としている。選ばれた子どもたちは週一回、それぞれの学校からセンターに集まり、教師や仲間と個人的に知り合う。「どんなものを集めていますか」とか、「歴史上の人物では誰と話をしたいですか」などという質問を通して、生徒一人々々のプロフィールが明らかにされる。自分の興味に即したことを徹底して、納得のゆくまで調べ上げ、やり通していく時間と空間を子どもたちに保障することによって、自分の能力を発揮させるように指導する。祝日などには、それぞれの友人をセンターに招いて昼食会を催し、新たな仲間づくりをする。また、センターには子どもだけでなく地域の大人も参加して、様々な技能を通して子どもたちの成長の手助けをする。例えばあるあやつり人形師は、子どもたちが自分の人形を作り、台本を書き、舞台を作り、みんなの前で上演するのを手伝って、子どもたちの人気を博した。その他、センターでは、「能力のある子どもたち」にとまどう従来の学校の教師たちへの援助

も行なっている。

以上が「かもめ」と呼ばれるプロジェクトの概容である。これらは、それ以前の教育プロジェクトにおいてもしばしば見られたことであるが、センターが地域の核としての役割を担っているアメリカならではのことで、と言えるかもしれない。時代は少し遡るが、十九世紀の終りから全米を席卷した「幼稚園運動」において、「幼稚園」は単に教育界の一角にとどまることなく、社会全体を巻き込んだ運動の核となって働いた。そのことに想いを馳せると、これらのプログラム、すなわち、センターを中心とすること、地域の大人が参加すること、さらにこうしたプログラムが次々に生み出されていくこと自体が、まさにアメリカそのものの表出ではないか、という気がしてくる。奇しくも、同じ号の中ほどに、「ヘッドスタート、その過去・現在・未来」と題して、ホワイトハウスでの、ヘッドスタート計画発足十五周年記念大会の記事が掲載されていた。「ヘッドスタートプログラムは、少くとも、さらに五年は延長する計画である」というカーター大統領の発言が、万雷の拍手に迎えられた、と記事は結ばれている。

アメリカの実験は、果てることなく続いていく。

(国吉 栄)